

福島民報による新春恒例の県内中学2年生200人のアンケート結果を見た。将来就きたい職業のうち「教師」は女子が1位、男子で3位である。どんなに時代が変化しても教員の日々の努力と生き方が子どもたちの心に灯をともしということだろうか。

確かにそういった一面もあるだろう。しかしである。中学2年生あるいは3年生で将来就きたい職業を明確にイメージできる生徒はそう多くはない。それでも、中学生は機会あるたびに「将来どんな職業に就きたいですか」と聞かれる。高校入試の面接でも同じようなことを聞かれる。中学生が認識している職業の種類などほんの一握りである。認識できている職業の代表格が教員なのではなかろうか。生徒にとって教員は、毎日目の前におり、かなり身近な存在である。少なくとも教員の本業である授業に関しては、生徒はライブで見ることができている。それ以外の仕事に関しても直接見ることがないにしろ、ある程度は理解できているかもしれない。

中学2年生で職場体験を実施するようになって久しい。だからといって将来就きたい職業が決まるわけではない。様々な職業に関し、知識として学習したとしても、生徒にとってはイメージすることができず分からないというのが本当のところである。

先日、娘に聞かれた。「県職員ってどんな仕事なの？」親として一応答えたが、明快な答えだったかという、そうはいえない。当たり前である。私には県職員の経験がないのである。県立高校の事務長や事務職員の仕事ならばそれなりに説明できる。今の私にとっては身近な存在になっているからである。また、ドラマや映画で県職員を取り上げたものでもあればいいのだが、そういったものもない。とりわけ“行政”という言葉がわかりづらい。

最近では世の中が絶えず変化しており、仕事について考えさせ答えを求めることには無理があるのかもしれない。何年後には、今あるうち仕事のうち、これだけの仕事がなくなってしまうなどと言われたら余計に考えることができなくなる。

そうであれば、何になりたいかではなく、「どう生きたいか」と聞いてみてはどうだろう。答えが決まっているわけではない。子どもたちは、こんなことを聞かれたことがないので、一瞬とまどうかもしれない。しかし、しばらくして、一人一人の言葉で答えるのではなかろうか。人としての生き方について語り出すかもしれない。何になりたいかという目標をもつことは大切だが、どう生きるのかという自分自身の羅針盤をもっていることは、もっと大切である。これならば、たとえ目標が変わったとしてもぶれることはない。

どう生きたいか、そしてどう生きるか。これらを生徒とともに考えられる教員でありたい。何も格好をつけることはない。教員も生徒と一緒に考えてあげたい。そのような教員のほうが生徒にとっては魅力的な存在になるはずである。

ここ数年、教員志望者の減少が問題になってきている。理由は様々あろうが、生徒の目の前にいる教員が、生き生きと働く姿を見せることができれば、自然と教員志望の若者は増えてくるはずである。人としてどう生きるか。教員としてどう生きるか。どんな志をもっているか。常に自分に問い続けていきたい。梁川高校の生徒諸君、君たちはどう生きたいか。